

prāṇāgnihotra と ātmayajña

伊 澤 敦 子

prāṇāgnihotra (PA)¹⁾関連の文献には、かなりの確率で ātmayajña 及び ātmayājīn という語が見出される。本論ではその ātmayajña と PA の関係について考察する。ātmayajña 及び ātmayājīn という語を含む文献は以下の通り。

- ①Śatapatha Brāhmaṇa (ŚB) 11. 2. 6. 13
- ②Vaikhānasasmārtasūtra (VaiSmS) 2. 18; ③5. 8. ; ④5. 9; ⑤10. 7
- ⑥Baudhāyanadharmasūtra (BDhS) 2. 7. 12; ⑦ 2. 7. 13; ⑧2. 10. 18
- ⑨Maitrāyaṇīya Upaniṣad (MU) 6. 9-10
- ⑩Mahābhārata (Mbh)12. 236 22-30; ⑪13. App. 11. 170-200
- ⑫Manu Smṛti (MS) 12. 91

これらの文献を、ātmayajña と ātmayājīn とを分けて考え、ātmayajña の語の見える文献群はAに、ātmayājīn の語の見える文献群はBにまとめる。

A ⑧BDhS 2. 10. 18 ⑨MU 6. 9-10 ⑫VaiSmS 2. 18 ⑤VaiSmS 10. 7

⑧は出家者の PA 的記述を含む。この前の 2. 10. 17 では出家の儀式 (vidhi) が説明されており、2. 10. 18. 8 で、祭火の移替え完了後は、祭主 (出家者)=5 祭火であるとして、彼の 5 prāṇa と 5 祭火を対応させている。このことから出家者の場合、5 prāṇa=5 祭火という考え方が、出家の儀式の際に祭火を自身へ移替えるという実際の行為と、密接に関係していることが推測される (cf. Mbh 12. 236)。2. 10. 18. 9 で、これら 5 祭火は ātman の中にあるとして、10 で ātman において献供する (juhoti) と言う。ここでは、ātman は明らかに身体を指す。一方、⑨ MU 6. 9 では ātman を祭る (yajati) とある。この MU 6. 9-10 は問題のある箇所、Buitenen や Bodewitz も詳説しているが²⁾、これらを参考にして以前に筆者自身 MU を検討してみた結果、6. 9 には gr̥hastha の PA 的記述が述べられており、その部分は最古層に属し、原型 MU の中心部分となっているのではないかという結論に達した。しかし、その 6. 9 自体にも新たに加筆された部分があり、6. 10 に至っては後代の挿入という見方が優勢である。従って、6. 9 の内容を指している 6. 10 の冒頭の asya ātmayajñasya という記述は、必ずしも直接に 6. 9

の PA の記述を提示しているとは言えないであろう。②はマントラから見て gr̥hastha の PA である。5 祭火と 5 prāṇa の対応以外に、祭式の構成要素と身体との対応がなされている。その後で、「このように adhvaryu 祭官は ātmayajña を構想して (saṃkalpya)」とある。⑤は出家者 (saṃnyāsin) の PA を扱っている。ここには②のような対応の考え方を示す表現はない。ただ、PA の規定により ātmayajña を構想して、という一文は②に似ているがそれより簡略で、これは②を意識して書かれたことが推測される。

以上 4 つの文献は全て PA を扱っているが、PA = ātmayajña とは考えられず、少なくとも実際の祭火を伴って祭式を執り行う gr̥hastha の PA の場合は、ātmayajña とは 5 祭火と 5 prāṇa の対応や、身体と祭式要素の対応という考え方を指すと考えられる。出家者については、実際に祭火の体内への移替えを行ったということと関連させている。

次に、ātmayājīn という語を含む文献 B を 5 群に分類して比較検討すると、以下のようになる。

B-1. ①SB 11. 2. 6. 13 これは、ātmayājīn という語が見出される最古の文献と目される。ここでは、新月・満月祭についての文脈の中で、1~12に渡って身体と祭式要素との対応関係が述べられている。その直後の13で、ātmayājīn の de vayājīn に対する優越性が宣示されており、ここで、既に実際の祭式の中で自身と祭式要素及び神格とを対応させる考え方が表明されている。その考え方を踏まえた上で、自身を目的として祭る ātmayājīn の優越性が説かれていることに注目すべきである。

B-2. gr̥hastha の PA と関連するもの。②VaiSmS 2. 18 ⑥BDhS 2. 7. 12 ⑦BDhS 2. 7. 13

⑥は gr̥hastha (śālīna, yāvāvara) の ātmayājīn とある。

B-3. 出家者と関連するもの。⑨MU 6. 10 ⑩Mbh 12. 236. 22-30 ⑪Mbh 13. App. 11. 170-200

⑨は ātmayājīn を saṃnyāsin, yogin と並べている。6. 9 の gr̥hastha の PA を述べている部分に比べて、6. 10 の方が後代の付加である可能性が強いという点に鑑みて、ここでの話題が gr̥hastha の PA から、それに付随して、後代において出家者型の ātmayājīn へと移行していったと考えられる。⑩は出家者の儀礼としての祭火の移替えについて書かれており、前出の A⑧とも関連がある。⑪は⑧、⑥との類似が見られる³⁾。これら BDhS の 2 つの箇所は、それぞれ⑧は出

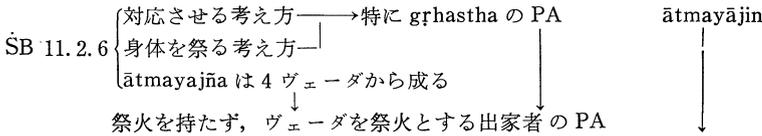
家者の、⑥は gr̥hastha の PA を扱っており、この ①では両者の混同が見られる。ātmayājñ が yogin と結び付けられている表現が注目される。また、身体と諸物質及び神格とを対応させている (cf. B-1①)。

B-4. ③VaiSmS 5.8 ④VaiSmS 5.9 ātmayājñ は祭火を持たない独身者の扱いとなっている。③は葬送儀礼についてで、④は āpaddāhya を主題としている。

B-5. ②MS 12.19 ここでは「一切の中に ātman を見る」という表現で ātmayājñ を説明している。③にも類似の表現がある。この ātman は身体ではなく、soul の ātman を指すと思われる。

以上のことから、ātmayājñ という語が示す意味の変遷を迎えることができよう。即ち、gr̥hastha の祭式を行う人→gr̥hastha の PA を行う人→独身者 snātaka→出家者で祭火を自身に移替え PA を行う人→ātman に一切を見る人

これを ātmayājña に視点を据えて考えると以下のようになる。



1) PA とは bhojana (食事) の儀式で、5 prāṇa を 5 祭火とみなし、この 5 prāṇa に対して食物を供物として捧げるといふもの。agnihotra の儀式を簡略化したものと言える。しかし、精神的な祭式 (祭式の内化) ではなく、供物も儀式行為も具体的に定められている。cf. H.W. Bodewitz: Jaiminiya Brāhmaṇa 1, 1-65 tr. and comm. with a Study Agnihotra and Prāṇāgnihotra. [Orientalia Rheno-Traiectina] Leiden 1973. p. 213ff.

2) J.A.B. van Buitenen (tr. & ed.): The Maitrāyaṇīya Upaniṣad, 's-Gravenhage 1962.

Bodewitz, op. cit., pp. 275-292.

3) ①Mbh 13. App. 11. 170-200

budhyamāna ātmaniṣṭhaḥ syād adhiṣṭhātā

覚醒しつつ、ātman を抛り所とする者は支配者たりえる。

cf. ⑧BDhS 2.10.18.11 sa eṣa ātmayājña ātmaniṣṭha ātmapraṭiṣṭha ātmānaṃ kṣemaṃ nayatīti vijñāyate//

sa sarvayājñāyājibhyo hy ātmayājñi vaśiṣyate

ātmayājñ はどんな祭式を行う人より優れている。

cf. ⑥BDhS 2.7.12.15 sarvakratuyājñinām ātmayājñi viśiṣyate//

〈キーワード〉 prāṇāgnihotra, ātmayājña, ātmayājñ

(東京大学大学院)